

純粹宗學の理念とその展開

室 住 一 妙

純粹宗學は唯一の理念をもつ、といふよりは寧ろ、その唯一の理念なるものが純粹宗學を成立せしめたのである。否、現に成立はしてゐないかも知れないが成立せしむべきものである。即ち純粹宗學が現在には成立してゐなければゐない程、却て一層強くその創生を要請するものが即ち理念なのである。

純粹宗學の理念こそが、實は純粹宗學そのものとして誕生し、發育し、活躍するものである。現今切實にその誕生否活躍を要望されてゐなければならぬ筈であるが、果して如何？ 深く省みる必要がある。

純粹宗學とは、徒らな抽象的理論宗學ではない。勿論、布教とか、寺門經營とかの策略を授けるものではない。が、そういふ生きた活動運營の依つて基づく所以を確め、實現し向ふべき目的を明め、更に態度を正し、方策を練る指導原理たるべきものであるとせば、具体的宗學の切實に要求せざるを得ぬものではなからうか。

純粹とは、まじりつ氣のないこととてさりとてかの無味乾燥な蒸溜水ではない。母乳のやうな、醍醐味、天の甘露ともいふべき滋養成分の精（エキス）のやうなものと見られる。宗學のエキスは、宗祖の純粹なる精神である。それをば嚴密な方法で明確に、公正な態度で把握、表現していく所の學術であるといへようか。

そういうことは、今更喋々を要せぬことであると、思ふ者があるかも知れないが、喋々を要せぬならば此上なく結構である。と申し度いが、それこそ現實的宗門意識の自覺を欠いてゐる所以、即ちそこにこそ一層眞劍に純粹宗學的理念を究明する必要があるのである。

二

現に山積せられてゐる宗門の諸問題、或は又方途を失うてゐる現宗學界の實狀、非常時的國家、危機暗雲に閉ざされたる世界を何を以て打開していくべきであるか。宗徒の覺悟は果していかに、學徒の使命はいかに。その言ふ所は壯にして大、行ふところは卑にして微、考ふる所さへも夢の如く幻の如くであるとしたら百年河清をまつことゝなる。宗祖の純粹な精神によつてのみ、一切の諸問題、危局、暗雲を解決し開拓し、一掃していくことが出来る。さう信ずる所以の原理、理想的な信念をば、純粹宗學の理念であるとする。それ故、理念は觀念的存在ではない、又理想的な概念でもない、とらはれたる我執の信念でもない。それは理想意志的にはたらく信念である。

而して、純粹宗學の理念は、信念ではあるにしても前述の如く、學術的にはたらく信念である。出來上つた學術体系の一角に陣どれる中心的物体ではなく、學術体系の全体そのものゝ中樞にまた全体の枝末にまで充溢しつゝはたらく精神である。未だ体系を作さぬとしても、そのときそのまゝにはたらいてゐる精神である。實に、已むに已まざるは、たらしきそのものであるといふことができるであらう。

純粹宗學の理念とは、現在に於て實在する。生きてゐる、はたらいてゐる、いかやうにといふならば、純粹宗學的觀念体系としては未完成である、生成途上であらう。生成途上にあるといつても未完成であるといつても、それは必

ずしも半端もの、幼稚なものとして看過してはならぬ。むしろそういふ現在に於てこそ一層慎重に究明し、見まもるべき實態であるともいへよう。なぜならば、純粹宗學の理念そのものは、決して純粹宗學の概念建築をめざしてゐるのではない。その生成過程に於てはたらく所のはたらし、そのものに意味があり、價值があるのであるから、従つてその展開こそ、所謂純粹宗學の理念そのものゝ表現であり、純粹宗學の内容であるともいふことが出来る。

三

純粹宗學の理念は内外二つの方面に展開する。外向するとは、中心主幹から發して、外延的に擴大していく所のはたらしである。なほそのうちに於ても、量的に布教宣傳或は教育等、それらに關連する所の施設・經營・研究等之に屬する。それから質的には、整理・調査などより淨化・改革乃至特殊な創造に及ぶ等、それらに關連する施設・經營・研究等。

次に内向するとは、中心主幹に發しつゝ、自体の一層内奥深き中核に向ふ所の、内包的に深化し、充實していく所のはたらしである。之は外向的のはたらしに相關しつゝ、中核原理に嚴密な有機的・精神的關聯を保つものである。例へば、布教宣傳の一項目について見ても、それが時代・社會の變遷・異質なるとき、中心主幹に發した在來の教權そのまゝか、又はその應用で事足る場合と、更にそれでは事及ばずして、或る程度の變革又は全く新たな創造的様態をもたらさねばならぬときは、一層嚴重に切實に、所謂、純粹宗學の内向的理念を要求する。而して、新時代社會に即應する所の布教宣傳上の應用變革、創造的諸様態をば、指導する所の原理或は批判する所の原理を發揮せしむるものが即ちその内向的展開なのである。

以上の如く理念の展開は、譬へば有機的生理器官における、かの動脈と靜脈との如くであらう。一は發動的に血液を送輸し一は之を收斂して淨化する。唯一の理念は、この二方向のはたらしきをなす心臓である。健全なる心臓にして始めてこの循環を活潑ならしめ、潑刺たる動脈靜脈の循環こそ中樞の心臓を強健ならしむることいふまでもない。

四

純粹宗學の理念は現在の超非常時局に對していかに認識し行動していくべきであらうか。例へば、こゝに先年來宗門的に重要な問題となつたものについて、いさゝか考究をすゝめて見よう。かの遺文録削訂といふことが問題化したのも、多少は事を好むもの、或は惡意を以て望むもの、又は職務上處置せんとする爲もあらう。その間に處する宗當局の苦心も買はねばならぬ。然し乍ら今日かういふ問題に遭遇するといふこと自体、我々宗門人に若干の責務がかゝつてゐると思ふ。又近く、曼荼羅諸尊勸請中における不敬問題といふのも、それに關連して今現に學界に論題化してゐるが、之は事甚だ樞要で、而もそれが全くの門外の人々、否或は多少とも好事的といふより攻撃の具としようとする人々に對する進退であり、釋明であるとき、前にも劣らぬ厄介な事柄に違ひない。即ち眞實の義を吐露しても、難信難解と申されてゐる宗の秘傳を一朝一夕に萬人に納得させ得ることもできず、さりとて誠意を欠いてもならぬ。その事情と對手を充分認識した上に、誠意を盡して應答すべきである。曲學阿世していくことは以ての外の態度であるが、さり乍ら只の一本棒のやうに、なんの曲もなく藝もない扱ひでは、事態を圓滑に進めるに役立つ。そういう奥秘の宗義はもつと慎重に扱ふために充分の注意をし度いと思ふ。上來のこの問題について我々宗門人の深く反省せねばならぬ点は、從來その扱ひが余り放漫になされた隙を衝かれたものではなからうか。又かうした疑義を投ぜられ、

辨明し釋明して進退を伺ふことは、宗門自体の從來の國民教化における怠漫を意味することにもなり、之を深く反省することなくして、一時逃れの辨明で事すんだとしても、次の日次の時代には更に深刻な問題となつて現れ來るであらう。我々はそういふ秋に善處するために、純粹宗學的理念に本く覺悟と準備とを以て、國民大衆層に眞實の宗門布教を徹底させていかねばならぬと考へるものである。また最近身延山に創設された宗立信行道場なるものも、趣旨として結構なことである。即ちこれは從來の學校教育の弊を補ひ、信行の磨きをかける所謂僧風教育の試みである。今のところ全く一の試みであつて將來はなほ、制度としても完整せしめ内容も充實せしめ、規模も大ならしめて、そこに眞の宗門的人材、肩書のためでなく、黙々と椽の下の力持ちともなり得る實力的法器を作るべく致さねばならぬと考へる。それらに關連して宗門寺院（都會・農村寺院）宗門財政等の問題もあらうが、之も前述の眞の法器に依つて、必ず自づと解決せられるであらう。思ふに今日ほど吾が日本は恵まれてゐる時代はない。それだけに超非常時である。一步あやまればその前途は累卵の危機を喚ぶことである。日露戦争における日本海々戦も皇國の興廢の機点であつたが、今日の時局は幾年にもわたる長期に於て、而もその對手は世界的な複雑錯綜した關係と戦局の進轉と吾國內情勢特に國民精神の動向消長に關係あることは、かの海戦のそれとは比べものにならぬ重大事であると思ふ。因つて政府當局も國民精神總動員運動を捲き起したのである。我々宗門人は宜しくこの時局、この運動をば深く認識して邁進し終局の美を濟すやうに努めねばならぬ。のみならず、實際の必要は一面、國內のそれと同時に對外的に進出飛躍といふ、その事である。即ち具体的には、滿洲の開教・布教網の完成であり、次に對支文化工作等である。此等は何れも我日本の生命線を確保し、更に進んで皇國日本のいよ／＼神聖なる使命遂行の機會なのであることはいふまでもないであらうが、滿洲並に支那本部における赤露の脅威は實に、武力よりはその宣傳力である。來るべき吾が國戰

後の疲憊混亂に乗じてはたらしきかけるであらうかの惡魔の如き思想である。之に對抗し排撃していくことが、我帝國の生命線確保の最も欠くべからざる要意である。それにはかの我國內外民衆の實際生活の安定とともに、公明正大にして圓融活達なる宗教信念の培養が肝心である。かうした物心兩面一躰の健全強化こそ、眞の金城鐵壁ではあるまいか。對支文化工作といふも、その所詮・要契は實にこゝに在るのである。過去の孔子教の宣傳とか、漢文字・支那語の學習とか、日本文化の藝術や知識の普及などは、その末梢的工作であつて、眞の基礎工作は、切實な實際生活と宗教信念の發揮そのものである。之を忽せにする時、支那全土の赤化が永く禍根とならう。又滿洲國も將來は日本と疎隔を來すであらう。そして、日支滿ともに分裂鬭争をくり返して、衰亡の一途を急ぐやうなことゝならぬとは、必ずしも保證し難いのである。是れ實に我々國民の責任である。之に反して、日滿支一体協和していくとき、こゝに世界は燦然たる眞文明の光輝に浴することができらう。畏くも 神武聖帝の勅語に「八紘一宇光宅天下」と仰せられた、その天業が恢弘されるのである。是れ實に我々皇民の光榮ある使命ではないか。別して宗門人、末法萬年のため世界人類のために、眞實の佛教即ち日本の佛法をば佛陀の豫言に應じて唱導せられたる宗祖の門下、日本人中の日本人としての責務であり、唯一の使命である。

光明にたどやく世界の絶對平和、常寂光土の建設を期して「一閻浮提第一の本尊此國に建て」給うた宗祖の教團、全宗門、今こそ舉つて奮起すべき秋である。

眞實の佛法、その佛法の西漸に奮起すべき嚴命はすでに降つてゐる。

「天竺國をば月氏國と申すは佛の出現し給ふべき名なり。扶桑國をば日本國と申す、豈に聖人出で給はざらむ。月は西より東に向へり。月氏の佛法の東へ流るべき相なり。日は東より西へ入る。日本の佛法の月氏へかへるべき瑞

相なり。月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり。五五百歳の長き闇を照らすべき瑞相也。佛は法華經謗法の者を治し給はず。在世には無き故に。末法には一乘の強敵充滿すべし。不輕菩薩の利益此れなり。各々我弟子等はげませ給へ、はげませ給へ」

然らば日蓮門下に果していかなる用意があるか。その本來の宗教信念發揮の實力、乃至構へは如何？

以上は純粹宗學の理念が、差し當つての社會・宗門事象を通じて、その外向的展開を考究したものである。次に之が内向的展開を見よう。

五

そも、宗門の組織的要素の實體は、信徒としての個人と家庭、僧侶と寺院、及び信徒・僧侶を統括する宗團なるものがあることは、いふまでもないが、今日前古未曾有の超非常時局に際して、内外一新、宗祖の天命を遂行するには有機的精神的に完全なる統制組織を整へねばならぬ。之を具体的に云へば、信徒は個人としても家人としても、日蓮宗門をせをうもの即ち日蓮大聖人の御門下として、その本分を盡すことである。又然るべく能化者即ち僧侶が指導教養すべきである。僧侶はそれが本務である以上、自ら先じて一般信徒に範を垂れ、個人としても、家人としても社會人としても、さすが立正安國宗の指導階級であると信徒には勿論社會にも國家にも認めしむることである。かくして、信徒の個人も家も、他宗他教の賞讃敬慕的となり、個人も寺も宗團も、無爲にして化すといふ、實力主義の布教・實徳主義の宣傳となつていくとき、全く一瞬にして立正安國が實現できよう。それは筆舌をもつてのみする所の、ともすればインテキ宣傳より、實物・實力・實徳・實用を以てする膨脹擴大は何ものでも抑へ、妨ぐることがで

きないのである。四海歸妙といふも全く一舉動である。

然らばその國民的模範の人及び家とはいかなる者ぞ。又眞の宗教、正しき宗教人、絶対に善き宗團とはいかなる者ぞ。我々宗門人の信する所は、此れは確にかくであると同實に示さねばならぬ以上、又實物・實力・實徳・實用を以て現はさねばならぬ以上、この根本基準即ち信念理想を明確に活きくと生かさねばならぬ。學的にいへば生ける信念即ち純粹宗學の理念の發動展開に俟たねばならぬ所以である。かくて益々理念は内向的に求心向に進んだ結果その中核をば宗祖に求めるのである。而もその求め方は、又特別な意味で求める。

完全圓滿なる人・家・宗團とは佛陀の謂である。今純粹宗學の理念は、その唱導の先達であり中心である宗祖に、その實證を求めようとする。即ち宗祖をば歴史的人格と見すに、現實的佛格と見ようとする。換言すれば、即身成佛せられたる者として見る。即身成佛の佛格の現證をば宗祖にのみ究明せんとすることこそ、純粹宗學の理念の展開的結論である。さし迫つた現實の全面を徹うて、外向的發展を論明し、さらに翻つてその現實に即しつゝ、内向的に展開してその中核を把握するのである。

六

扱て、如上の結論に本き、純粹宗學的理念は更に、教學的に課題して次の研鑽を要求することとなる。

すなはち「即身成佛論」なるもの之である。勿論、古來この義目は非常に重要視され、古哲先匠も多大の業績が残され、汗牛充棟も嘗ならざる事であらうが、時勢は切迫してゐる。それらの文献學的乃至解釋學的研究は關いて、達意的に取要的に研鑽の歩武を進めねばならぬと思ふ。そこで、宗祖自体の範圍に限つて、宗祖は之について、いかに

考へいかに抜ひ、いかに實踐され、いかに体得され、いかに教導され、又その教への真意はいかに、證據はいかに、文證・現證・道理證の上からいかに把握されたか、此等について、吾人はいかに考へ、いかに信じ、いかに實踐していくべきか。而も、それらについて現代生活上よりの矛盾、問題を究明して、更に現下急要の時局に處する用意を充備せねばならぬことである。この研鑽に本く信念とその鍛練こそが、現代的に發動する所の教權の源泉なのである。宗門の生命的源泉の涌くところ眞の大日蓮の呱々の聲は近いであらう。

然らば右の研鑽には、いかなる態度、方法、資料が要るか。第一態度は公明正大なること、即ちあくまで嚴密に自由である。第二に方法には、醇化せられた意味の精神科學的方法をとる。之は從來のデールタイ學派のそれを佛教的世界觀から止揚したともいふべき立場に於て、販納的方法以外に演繹的方法が重要な役割を果すものである。第三に資料としては、茲に新たに集めねばならぬものもある。

一、「宗祖の傳記」今までの多く興味本位のものであつたが、之は考證學的に確實な資料によるもので、さし當り御傳資料集を編纂すべきである。同時に年譜である。これはすでに幕末の學者健立日諦玄得日香兩師の編輯が先驅的にある。それを更に補訂完成せしむること。なほ御傳資料集には、御門下諸檀越方の史料も勿論編すべきであるがその上これらの背景をなす所の一般史實特に政治、宗教、社會、經濟、文化の諸部門にそれ／＼の定説を網羅して編輯しをくことは、宗門人にとつて知識的に何よりの必要な強みであらう。即ち研究的にも或は實際運用の上にも當然必要なものである。

二、「御遺文の編年的全集定本」現在流行されてゐるものを、更に研究完整し、就中眞偽未決のものや、且く先づ別輯をいいて、嚴撰主義で、定本を作ることである。然し一般用として普及せしむるものはそれ／＼の索引を附し

解説をつけ、読みよく、廉價に、手軽く、堅牢に愛寵されるやうな装幀で刊行すべきであらうが、さきの宗定の定本は宜しく永久保存に堪え、莊重にすべきである。現在刊行の所謂「縮刷遺文」には登載されない全く未刊行の御遺文断片も研究に従つて、その適當系年に組み入れ、ともかくいかなる断簡零墨も洩らすことなく、嚴確な定本が、眞の研究用に當然必要なものである。

三、「御眞筆本尊全集」これも近年に至り漸く、私人によつて二三の刊行を見たが、それも全く小部分なもので、全數の豫想の四・五分の一を出でないであらうと思ふ。從來この点についてさほどの重要性を認めなかつたといふ、一の雄辯なる證左ともなつて甚だ歎かましい事である。その因果がむくへ來り、年來の諸問題が惹起されたこと、内外・上下に對し畏多き極みではないか。現に天照八幡勸請の意義の究明も、やはりこの基調に關係あることであらう然し今は、さうした事柄はともかくとして、御本尊特に宗祖御眞筆の本尊の全集格護は、そのまゝ、法命相續の樞要なる事行なのである。而も、宗祖の内證生命をば最も雄辯に具體的に直瀉せられたる、本地の風光に至つては、宇内萬邦絶對の尊嚴的靈寶である。かの御傳記の確實豊富な研究も、かの御遺文全集の完璧も、この御本尊全集によつて点眼し奉るべき三位一躰のものである。とりあへず、宗門の事業として、その所在、内容編年目錄でも編成すべきである。幸ひ、之が寫眞集を費用をいとせず、永久保存といふ目的のもとに進めてゐる千葉市の片岡氏があるが、之も一個人にまかせをかず、好意的援助、指導、積極的贊助を以て、その完成を宗門としても期すべきである。即ち全門下の責務であるから。

なほ直接研究上の要求でもないが、純粹宗學的理念の展開として、ついでに一言し度いのは、以上の根本教權的法寶を永久に護持し奉るべき設備即ち寶藏の建設である。宗門事業として、最も安全な由緒ある靈地を選び、數ヶ所に

建設するべきこと。かの中山の聖教殿はその一試設であるが、宗門人は奮つてその神聖な意義を体して、その充實、格護の制度をなほ一層練る必要がある。いつ何時、空襲爆破に曝されるか分らぬ時、殊にその必要を痛感する。

省れば、事は末法萬年の未來のために、世界を寂光土たらしむる聖業のために選ばれたる光榮ある個人であり、宗團ではないか。小さいその日暮らしの觀念や情實を洗ひ流して、洋々赫々たる宗祖の大慈願海に悠遊しようではないか。

根本資料としては、先づ大体以上とすれば、次に之が具体的に研究の機關について考究し度い。

七

研究の機關といへば、たしかに大學がある。研究院もある。然しそれらはすでに現實として、純粹宗學的理念の展開に參與してゐないと思はれるのは研究者の動機に於てそうである。公明正大であるべきだ。互に猫の鼠をねらふやうな卑しい態度があつてはならぬ。學閥があつてはならぬ。情實があつてはならぬ。功名や地位や利欲の爲めには、いかなる業績すらも、宗祖の法命を冒し奉るとさへ畏れて自ら慎み度いと思ふ。かの綱要導師を中心に五人の盟約などは、實にそのよき模範で、教へらるべき意味が多いのである。以上は人の問題であるが、設備としては、さきの資料を蒐めた圖書館、場所としては勿論、清閑な健康地、さらにそこには、信行中心に則る道場が儼存されてゐること。發表機關には即ち討論、非公開の文書（適宜に公刊するは慎重になすべきである）等を有する。そして研究委員は互に敬重愛護し協同研鑽して少しも個人的な嫉妬、排擠なく、相はげまし、相たすけ、切磋琢磨の益友、異体同心同信同行の善知識の團體を形成すること。

同時にまた右の超越的アカデミーな組織における欠陥をも充分認めて、生ける現實世界との交通理解を願慮すべきは勿論のことである。これらはユートピアとしての談柄でなくて、さし迫つた時局への嚴正な指導原理即ち、理念の外向的一大展開に必須の機關であると考へる。が然し、現實はまだ今しばらく、之をユートピアとして看過して流れいくことであらう。

八

私は今、この稿を結ぶに當つて、讀者に附言してをき度いことは、以上の叙述でも明かであるやうに、純粹宗學の理念は何時、いかなる處でも、徒らな個人的發見發明を快しとするものを嫌ふことである。それはいついかなる場合でも、現實的諸問題の些少なる裁決に於ても、必ず宗祖の純粹なる精神發動に依らねばならぬから。従つて名を競ひ利の爲にするやうなのは、まことに畏れ多いことであらう。純粹宗學は、それ故に私有物であつてはならぬ。また私生物でもない筈である。この稿は實に、文辭章段は稚拙であらうが、その所説の義理に於ては、私のものとして徒らに卑下せずに、却て讀者諸賢のもの、公のものとして頂かねばならぬと信ずる。然し誤謬があつては一大事である、大いに啓蒙し、叱正して頂き度い。若し所論正しとせば、直ちに、この結論より出發して、更に進んで内外に向ふ純粹宗學の理念の展開を期して頂き度いのである。即ち私は、衷心から、如上の意味の即身成佛論をば、私自ら稿する以上の價值あるものを、一般諸賢に期待して已まないものである。つまり再び拙稿の出づる餘地なきやうに待望するのである。但し參考までに餘白の恵まれた節には、始めて拙稿を披瀝して、更に啓蒙叱正を蒙り度いと願ふのみである。

— 昭和十二年十月三日稿 —